国指定史跡　西南戦争遺跡　史跡指定記念

中学生用

西南戦争の地を辿ろう

植木・玉東



植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会

植木・玉東

西南戦争遺跡 イラストマップ

目　次

- 西南戦争遺跡イラストマップ …… 1
- 植木・玉東遺跡一覧 …… 3
- ふるさとで起こった西南戦争の歴史を勉強しよう …… 5
- ふるさと「植木・玉東」 …… 7
- なぜ西南戦争は起こったのだろう …… 9
- 熊本城攻防戦 …… 13
- なぜふるさと（植木・玉東）が激戦地になったのだろう …… 17
  1. 向坂の戦い
  2. 木葉の戦い
  3. 田原坂・二俣の戦い
  4. 吉次峠の戦い
  5. 横平山の戦い
  6. 田原坂陥落
- 戦禍に見舞われた植木・玉東 …… 29
- 西南戦争終結まで …… 31
- その後の日本はどうなったのだろう …… 33
- 私たちにできること …… 35
- 西南戦争関連項目一覧 …… 39



西南戦争遺跡を保存する取り組み

熊本市北区植木町、玉名郡玉東町は「植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会」を発足し、両市町が連携して西南戦争の調査研究や遺跡の保存活用を行っています。

西南戦争が起きた時代は日本の歴史上、激動の時代です。その時代に、志を持ちこの地で生涯を終えられた方々に哀悼の意を表し、近代化の礎となったこの出来事を後世に伝え残すという趣旨のもとで取り組んでいます。

■ は、平成25年3月27日 国指定史跡箇所

植木遺跡一覧（表中の番号はP1～P2のイラストマップの番号と一致）

❶豊岡眼鏡橋から ❷一の坂 二の坂 三の坂への道	麓の豊岡眼鏡橋からの標高差はわずか80mの田原坂。一の坂、二の坂、三の坂と頂まで1.5kmの曲がりくねった道が続く。この道だけが唯一大砲を曳いて通れる道幅があり、この道を越えなければ政府軍の砲兵隊は熊本まで進めない。薩摩軍にとっては生死を制する道である。ともに戦略上の拠点であり、この平凡な坂道を中心とした一帯が激戦の舞台となったのである。[国指定史跡]
❸谷村計介之碑	政府軍本営に連絡を取るために密使として熊本城を抜け出した谷村であったが、途中で熊本隊に捕まる。「老婆を残してきたので城を脱走した」と偽り、数日薩軍に身を寄せていたが隙を見て逃げ出し、見事任務を完遂した。その後、田原坂の戦いで戦死した。
❹田原坂公園 ・植木町田原坂資料館	田原坂公園は、いまではツツジやサクラの名所として知られる美しい公園である。西南戦争では17日間にわたる戦闘が繰り広げられた激戦地でもあった。園内には、激戦の跡が生々しい弾痕の残る家（復元）や慰霊塔・土蔵造りの資料館が建ち、往時の戦いを知ることができる。政府軍が田原坂の戦闘で消耗した小銃の弾薬は、一日平均32万発、多い日は60万発にものぼったという。
❺七本柿木台場 薩軍墓地	明治10年3月初旬から4月中旬まで続いた田原坂周辺の戦いで、木留・七本付近で戦死した薩摩軍や熊本隊の兵士311人が埋葬されている薩摩軍墓地。地域的にみて政府軍が田原坂の攻略に成功して薩摩軍の本営まで押し迫った時期の戦死者とみられる。
❻七本官軍墓地	西南戦争で戦死した政府軍の軍人・軍夫・警視隊を埋葬した政府軍墓地は県内に21ヵ所つくられている。この七本官軍墓地には、「田原坂の戦い」のあと、植木や吉次・木留、辺田野・平野・滴水などで戦死した各鎮台および近衛兵300余人が埋葬されている。[県指定史跡]
❼山県有朋歌碑	激戦の地であった吉次峠に至る途中にある。昭和17年に有志により建立されたもので「木留しらむ砦のすてかがりけふると見しは桜なりけり」と刻まれている。
❽辺田野熊野座神社	4月上旬の激戦で、乃木少佐以下9人が同神社境内で負傷。神社境内にはこの時を詠んだ乃木大将の詩碑がある。
❾薩軍病院跡	木留は薩摩軍の本営と薩摩軍病院がおかれていた場所である。また当時薩摩軍に呼応して、政府軍と戦闘を交えた各地編成の諸隊（薩摩軍に党するということから党薩軍とも呼ばれる）があった。そのうち熊本県四隊（熊本隊・竜口隊・協同隊・人吉隊）のひとつ「熊本隊」の本営もあった。
❿荻迫柿木台場 ・薩軍美少年の墓	昭和7年に柿木台場の根元に建てられた。「君ハ日州庄内ノ人　西南の役僅十五才ニシテ薩軍ニ投ジ奮戦此地ニ没ス　時ニ明治十年二月二八日義軍遂ニ敗レシモ君カ英霊ハ永ク此地ニ眠ラン」と刻まれている。
⓫山頭（やまがしら）遺跡	政府軍と薩摩軍が激しい銃撃戦をおこなった遺跡で、発掘調査によって政府薩摩両軍が直接銃火を交えた遺跡が発見されたのは国内で初めて。政府軍の塹壕跡からは当時最新式のスナイドル銃や薬莢（やっきょう）が出土。薩摩軍の陣地跡からはエンフィールド銃などの雷管が出土した。
⓬河原林少尉戦死の地	連隊旗手であった河原林少尉が、命を落とした場所。この際、薩摩軍に軍旗が奪われ、乃木少佐は、必死で奪い返そうとしたが、部下の制止で思いとどまりこれを一生の恥として、西南戦争後も乃木少佐は悔やみ続けることになる。
⓭千本桜 ・乃木大将記念碑	明治10年2月22日、乃木少佐率いる第十四連隊は向坂で薩摩軍と遭遇。この日の戦闘が田原坂をめぐる激戦の序章となった。向坂には政府軍墓地のほか「河原林少尉戦死の碑」が残る。また、この戦闘で乃木連隊が撤退した千本桜の地には「乃木大将記念碑」がある。

⓮植木天満宮	両軍の緒戦の地。2月22日、乃木少佐の前衛隊と薩摩軍の村田および伊東隊が衝突。田原坂をめぐる激戦の戦端が開かれた。
⓯薩軍弾薬庫跡	薩摩軍の植木での拠点となっていた真教寺と西寺。「薩軍弾薬庫」はこの西寺にあった。田原坂で敗退した薩摩軍は植木へ退却、それを追う官軍との間で激しい戦闘が繰り広げられる。このような状況のなか、突如として大音響をたてて火薬庫が爆発、西寺を吹き飛ばした。その大爆発の理由は未だに不明となっている。

玉東遺跡一覧（表中の番号はP1～P2のイラストマップの番号と一致）

⓰宇蘇浦官軍墓地	政府軍の将兵および抜刀隊として参加した警視局巡査たちをあわせ399人の戦死者を葬っている墓地で、乃木希典少佐率いる第十四連隊の吉松秀枝少佐や、武勲で有名な谷村計介の墓もある。[国指定史跡]
⓱有栖川宮督戦の地	ツツジの花が趣を添える美しい公園。征討総督に任ぜられた陸軍大将・有栖川宮熾仁親王が田原坂攻略戦の戦跡を見てまわられた地であり、記念碑が建立されている。[町指定史跡]
⓲上木葉官軍本営跡	もとは上木葉の高田家の屋敷跡で、田原坂占領の頃まで政府軍の本営として使用された。第一・第二旅団の本営が七本に移った後も陸軍中将・山縣有朋が拠点を置き、作戦指導や戦後処理などをおこなった。
⓳正念寺 ⓴徳成寺	西南戦争で負傷した兵士を治療した政府軍病院跡で、当時のままの正念寺の山門には弾痕が残る。赤十字社の前身“博愛社”が置かれたと伝わる。[⓳国指定史跡]
㉑高月官軍墓地	西南戦争の激戦地であった、田原坂・吉次峠・二俣・横平山などで戦死した政府兵士が980人葬られている。数ある官軍墓地の中で最大のもの。[国指定史跡]
㉒二俣瓜生田官軍 砲台跡	田原坂攻撃の為に設置された野戦砲台。上木葉の本営から毎日大砲が運び込まれていたという。近年の発掘調査で、大砲の轍（わだち）が確認された。
㉓横平山戦跡（公園）	田原坂・吉次峠と並ぶ三大激戦地跡で、戦術的に重要な地点であったところから政府・薩摩両軍の激しい争奪戦が行われた。今なお残る塹壕の跡が壮絶な白兵戦を物語っている。[国指定史跡]
㉔吉次峠戦跡（公園）	三大激戦地のひとつで、薩摩軍防衛線の最後の牙城となった地である。薩摩軍が死守した吉次越えは、政府軍に“地獄峠”と恐れられた険しい場所で、両軍の間に激しい攻防戦が展開された。党薩諸隊のひとつ、熊本隊の一番小隊長佐々友房が「君見ずや吉次の険は城よりも険なり」と詠った詩が刻まれた詩碑が、吉次公園にある。[国指定史跡]
㉕篠原国幹戦没の地	薩摩軍一番大隊長篠原国幹は、薩摩人に大変慕われた人物であった。吉次峠では、その絶妙な用兵で精強な薩軍を指揮し先頭に立って戦ったが、かつて篠原から親しく指導を受けていた近衛部隊の指揮官・江田少佐の指示する狙撃を受け壮絶な戦死を遂げた。篠原の胸を射抜いたのは、一説によると、後に村田銃を考案した官軍きっての名射手・村田経芳少佐だともいわれている。
㉖薩軍三勇士の墓	薩摩軍・荻原隊と思われる3人が葬られている。西安寺周辺の戦闘で、負傷した3人は玉東町上白木の民家に匿われ治療を受けるが、その甲斐なく絶命。その地に葬られ、現在も供養の火が絶えない。
㉗乃木希典奮戦の地	向坂にて連隊旗を奪われた乃木少佐率いる第十四連隊は、形勢不利の為、翌23日木葉に後退。しかし、木葉の戦いでも苦戦し、ついに退却することになる。退却した稲佐付近にて乃木は薩摩軍に襲われ落馬。大橋伍長、摺沢少佐が奮戦し身を挺して乃木を助けた。九死に一生を得た乃木は木葉川を渡り玉名の寺田へ退避して隊を集結している。

ふるさとで起こった西南戦争の歴史を勉強しよう

この本の案内

この本では、私たちの郷土に残る西南戦争について紹介しています。

西南戦争は、今から130年ほど前、日本で起こった最大の内戦です。この戦争を機に日本は大きく変わっていきました。

植木・玉東の一帯はこの戦争で激戦地となったため、各地にはさまざまな遺跡が数多く残り、戦争の被害の大きさを伝えています。西南戦争の発端から終結まで、またその後の日本の動きについて学び、郷土がどのように戦争に関わったのか、この本を活用して、郷土の歴史を深く知り、一緒に学んでいきましょう。

学ぶための手順

これから郷土に残る西南戦争遺跡について実際に学んでいくために、どのようなことをすればいいのでしょうか。

①まず自分の知っていることについて書き出してみましょう。

②おじいちゃんやおばあちゃん、周囲の人が知っていることを聞いてみましょう。

③図書館などで本に書いてあることを調べてみましょう。



④地域の郷土史家や先生など詳しい人に聞いてみましょう。

⑤実際にその場所に行ってみましょう。

⑥植木・玉東以外に残る西南戦争遺跡を調べてみましょう。

⑦郷土を守っていくために、戦争を繰り返さないために何ができるか考え、話し合ってみましょう。

これだけではなく、自分で調べて、見て、聞いて、考えることが大切です。いろんな情報が集まったら整理してまとめてみるとよいでしょう。さらに、興味を持った歴史や人物について詳しく調べていくと、現在の日本が形づくられていく過程と、郷土のかかわりについて理解できます。



年表を作ろう

それぞれの時代背景が分かるとイメージが浮かびます。同じ時期の日本、世界の出来事などを一緒に調べると新しい発見があるかもしれません。

指定文化財ってなんだろう?

遺跡を探していると、側にある看板などに、その説明が書かれているものがあります。そこに「○○指定○○文化財」という文字をよくみかけます。国は「文化財保護法」という法律で、特に大切なものを未来へ残すために保護しています。「○○指定」には国指定、熊本県指定、熊本市指定、玉東町指定など、価値や重要性により指定しているところが違います。その基準は客観的な歴史における位置づけ、学術性、第三者による評価などに基づいています。私たちの身近にある西南戦争遺跡は、現地を視察した文化庁や関係機関から、遺跡としての価値を高く評価されており、点在する戦跡の国指定史跡を目指すことで、戦争の悲惨さを伝える歴史遺産を保存し、活用していけるよう取り組んでいます。

どこかに認められたり、指定されたりすることは文化財を「保護（守る）」という面では大事なことです。しかしもっと大事なのは、私たち一人ひとりの、それらを守っていこうという気持ちです。

ふるさと「植木・玉東」

私たちの暮らす町

熊本市北区 植木町

熊本市北区**植木町**は、熊本県の北部にあり、2010（平成22）年に熊本市と合併しました。面積約65.80km²、人口約3万人で、日本一のスイカの産地として知られています。熊本市の北側に位置する郊外の都市となっています。中心部は台地になっており、その台地を避ける形で町の西側をJR鹿児島本線が通り、町中心部を九州の大動脈である国道3号が走ります。現在、中心部付近は国道208号との合流地点であり、九州自動車道には、植木インターチェンジがあります。熊本市植木町は古くから交通の要所として歴史のある町です。

玉東町

玉東町は、熊本県の北西に位置し、西は玉名市と隣り合う面積約24.40km²、人口約5,500人の町です。町の南にある三ノ岳の南から北へ緩やかに傾斜した台地に、みかんなどの柑橘類が多く栽培されており、年間の出荷量は、みかんだけでも約8,000ｔもあります。平坦地では米やいちごなどの栽培も盛んです。JR九州鹿児島本線と国道208号が東西に町を二分するように走っており、九州新幹線が町を縦断しています。JR鹿児島本線の木葉駅を中心に町が形成されており、熊本市中心まで電車で20分と近く、都市近郊にある町として、また、木葉山・三ノ岳といった山々に挟まれた自然の豊かな町です。



江戸時代から明治時代のふるさと

江戸時代の初め、豊前街道の宿場町として植木の味取町が栄え、その後三池往還などの分岐点として、味取の南に新しい宿場町である味取新町が開かれます。これが現在の熊本市植木町中心部の基礎となりました。明治初年には自由民権運動の日本における先駆的役割を負った植木学校（→P14）も開かれ、熊本県の自由民権運動の舞台ともなっています。

また、三池往還の道筋にあり江戸時代の宿場町として栄えたのが玉東町の木葉です。当時は、農業の傍ら商業を営むところが多かったといいます。焼き物も盛んで、素焼きの木葉猿は古来より土産物として東西に名を馳せていました。



豊前街道

熊本を起点として北上し、植木、鹿央、山鹿、和水から南関を経て豊前・小倉に至る道のこと。参勤交代道として栄え、大名行列の休憩処が設けられるなど、道沿いの町は賑わいをみせていました。

三池往還

植木の味取から分岐しているもう一つの豊前街道の別称です。玉東町木葉、玉名市高瀬、岩本橋（荒尾市）、大牟田三池、江浦から勢高（瀬高）へ出るルートです。

植木・玉東地域は古来より主要な道路が通っていたため、商工業が発達していました。江戸時代には、味噌・醤油などの商工業が栄え、明治時代になると製糸・養蚕業が盛んに行われるようになります。

1877（明治10）年には西南戦争の舞台となり、その後は政府が新たな反乱への対応と産業振興のため、北九州～山鹿～熊本～鹿児島を貫く国道3号線を開通させ、さらに九州鉄道（鹿児島本線）を通し、現在の町が形づくられました。


木葉猿

吉次往還

熊本城下から玉名市高瀬を結び、往還のほぼ中央には、吉次峠があります。熊本への近道として活用された主要道でした。吉次峠は、昔、金売吉次という人物がここで強盗に殺害されたという由来からその名がついたとされます。

加藤清正が、横島干拓のときにこの道を通り、ぬかるみに石畳を敷いて道を整備しました。

トピックス

清正が整備した道

熊本城下の街道は、北へ向かう豊前街道、東へ向かう豊後街道、南へ向かう薩摩街道と日向往還がありました。これらの街道は、加藤清正により整備され、参勤交代道としてだけでなく、商人や、旅人が利用する物流の道として使われていました。

なぜ西南戦争は起こったのだろう

当時の日本は、政治混乱の真っただ中

江戸時代の終わり、鎖国制度で長く国を閉ざしていた日本に、アメリカから黒船に乗ったペリーが来航し、開国をせまります。そして、日本は※近代国家へと大きく変わる時代の波に飲み込まれていきます。鎖国を続け外国を排除すべきという攘夷論と、鎖国をやめ外国と※通商条約を結ぶべきという開国論の対立に加え、国家権力を江戸幕府から朝廷に戻すべきだという尊王思想などが入り乱れ江戸幕府を倒そうという動きが加速、政治は混乱します。最終的に、1867（慶応3）年、江戸幕府第15代将軍徳川慶喜が政権を明治天皇に返上した**大政奉還**により260年以上もの間続いた江戸幕府は終わりを告げ、明治時代が幕を開けます。

この大政奉還に大きな影響を与えた藩の一つが、“政権を天皇に戻し、外国を排除しよう”という尊王攘夷論を強く主張していた**薩摩藩**（鹿児島県）で、日本を近代化に導いた**明治維新**という改革の原動力となった一人が、薩摩藩士、**西郷隆盛**でした。

大政奉還後、王政復古の大号令が発せられ、天皇を中心とした国家が誕生します。これに伴う一連の改革を明治維新といい、倒幕運動で活躍した薩摩藩（鹿児島県）・長州藩（山口県）の人々が新政府を担いました。彼らは、旧幕府勢力を戊辰戦争で一掃し、近代化を進めるために次々と新しい制度を作ります。その中には※廃刀令や※秩禄処分など武士の特権をとりあげるものもありました。こうして次第に新政府に対する士族（武士）の不満が噴出するようになり、全国各地で数万人規模の暴動が起こります。

士族の反乱は、1874（明治7）年の佐賀の乱、1876（明治9）年、神風連の乱（熊本県）、秋月の乱（福岡県）、萩の乱（山口県）と広がり、西郷隆盛による国内最大の内乱、西南戦争を迎えます。

※近代国家
自由、平等、基本的人権の保障、議会政治、法治主義による中央集権制などを特徴とした国家。

※通商条約
外国と貿易をすることを、国と国とが文書で約束すること。

※廃刀令
江戸時代のように、武士が刀を持つことを禁止されること。1876（明治9）年制定。

※秩禄処分
俸禄（給与）を支給されなくなること。1876（明治9）年実施。



西郷 隆盛（1827～1877）
薩摩藩出身の士族、政治家。西郷隆盛は、幕末の志士として、また明治維新の立役者として名を馳せた人物です。若いころは薩摩藩の政治活動等に奔走しますが、のちに坂本龍馬の仲裁のもと長州藩と薩長同盟を結び、倒幕に力を入れました。非常に人望が厚く、藩内外の人々から慕われていました。また明治天皇も、幼少期に西郷隆盛が教育係だったことから親しい間柄だったということです。各地に西郷隆盛に関するエピソードは多く残りますが、特に戦争で田畑が荒れ、住民の暮らしを壊してしまうことを心配していたということは、今も語り継がれています。西南戦争で総大将となり最後を遂げた後も、生存説が流れるほど人民の“西郷さん”の人気は絶大なものでした。



日本最大にして最後の内戦「西南戦争」

明治維新後、明治政府の※参議となり、陸軍大将も兼ねていた西郷隆盛は、1873（明治6）年、朝鮮への対応をめぐる**征韓論争**で自分の意見が受け入れられなかったため参議を辞め、故郷の鹿児島（旧薩摩藩）へ帰ってしまいます。その後、当時新政府の中心を担っていた鹿児島出身の官僚や軍人約600人も辞職。鹿児島に帰り、西郷とともに**私学校**を設立します。私学校とは士族を中心とした軍事等の学校です。日本各地で士族の反乱が起こる中、明治政府は士族の集まりである私学校の動きに警戒し、鹿児島にあった弾薬製造設備を大阪へ移転してしまいます。これを秘かに行ったため、私学校の学生だった旧薩摩藩士らが激怒し、政府の弾薬約6万発を奪うという事件が発生しました。同時に、明治政府による西郷隆盛暗殺計画のうわさが流れます。これをきっかけに旧薩摩藩士らは明治政府に対する挙兵を決定し、日本国内最大にして最後の※内戦**「西南戦争」**が始まりました。

この時、西郷隆盛は、挙兵を話し合う旧薩摩藩士らの中で一人、最後まで口を閉ざしていました。しかし旧藩士らの意志の固さを知って、ついに決意したと伝えられています。

※参議
国の政治に参加して、政策などを決める役職のこと。

※西南戦争
「明治十年戦争」、「丁丑の乱」ともいう。

世界と日本の動き

世界の動向	日本の動向
1861 アメリカ南北戦争（～1865） イタリア王国が建国	1867 大政奉還
1863 アメリカ大統領リンカーンが黒人奴隷解放宣言	1868 戊辰戦争が起こる
1867 スウェーデンのノーベルがダイナマイトを発明	1869 版籍奉還が行われる
1869 スエズ運河が開通	1871 廃藩置県が行われる
1870 普仏戦争	1873 地租改正が始められる
1871 ドイツ帝国成立（～1918）	1874 民選議院設立建白書が政府に提出される
1877 アメリカのエジソンが蓄音機を発明	**1877 西南戦争が起こる**
イギリスがインド帝国をつくる	1881 国会の開設を政府が約束する
1879 エジソンが白熱電灯を発明	1884 秩父事件が起こる
1882 墺独伊三国同盟	1885 内閣制度発足
1895 ドイツのレントゲンがX線を発見	1889 大日本帝国憲法が制定される
1896 第1回近代オリンピック競技	1890 第一回衆議院議員総選挙が行われる
1897 ドイツのディーゼルがディーゼル機関を完成	1891 足尾銅山鉱毒事件を田中正造が議会で取り上げる
1898 フランスのキュリー夫妻がラジウムを発見	1894 日英通商航海条約が調印される
1901 第1回ノーベル賞	1895 下関条約が調印される
1903 アメリカのライト兄弟が飛行機発明	1902 日英同盟が成立
1911 辛亥革命	1904 日露戦争が起こる
1914 第一次世界大戦勃発（～1918）	1905 ポーツマス条約が調印される
	1910 韓国併合が行われる

江戸時代末期から明治時代に活躍した人物

人物年表

1810 1820 1830 1840 1850 1860 1870 1880 1890 1900 1910 1920 1930 1940 1950

江戸　明治　大正　昭和

・大塩平八郎の乱　・戊辰戦争　・日清戦争　・第一次世界大戦　・第二次世界大戦
・ペリー来航　・西南戦争　・日露戦争　・日中戦争

※西南戦争時の年齢

佐久間象山（さくましょうざん）	1811～1864
井伊直弼（いいなおすけ）	1815～1860
勝海舟（かつかいしゅう）	1823～1899　※55歳
岩倉具視（いわくらともみ）	1825～1883　※53歳
西郷隆盛（さいごうたかもり）	1827～1877　※51歳
ジョン万次郎（まんじろう）	1827～1898　※51歳
吉田松陰（よしだしょういん）	1830～1859
大久保利通（おおくぼとしみち）	1830～1878　※48歳
木戸孝允（きどたかよし）	1833～1877　※45歳
坂本龍馬（さかもとりょうま）	1835～1867
岩崎弥太郎（いわさきやたろう）	1835～1885　※43歳
福沢諭吉（ふくざわゆきち）	1835～1901　※43歳
天璋院篤姫（てんしょういんあつひめ）	1836～1883　※42歳
徳川慶喜（とくがわよしのぶ）	1837～1913　※41歳
板垣退助（いたがきたいすけ）	1837～1919　※41歳
山県有朋（やまがたありとも）	1838～1922　※40歳
大隈重信（おおくましげのぶ）	1838～1922　※40歳
高杉晋作（たかすぎしんさく）	1839～1867
伊藤博文（いとうひろふみ）	1841～1909　※37歳
田中正造（たなかしょうぞう）	1841～1913　※37歳
陸奥宗光（むつむねみつ）	1844～1897　※34歳
東郷平八郎（とうごうへいはちろう）	1848～1934　※30歳
乃木希典（のぎまれすけ）	1849～1912　※29歳
明治天皇（めいじてんのう）	1852～1912　※26歳
小村寿太郎（こむらじゅたろう）	1855～1911　※23歳
犬養毅（いぬかいつよし）	1855～1932　※23歳
正岡子規（まさおかしき）	1867～1902　※11歳
夏目漱石（なつめそうせき）	1867～1916　※11歳
徳富蘆花（とくとみろか）	1868～1927　※10歳



メ　モ

月　日（　）

月　日（　）

月　日（　）

月　日（　）

熊本城攻防戦

明治10年2月15日、薩摩軍が出発

1877（明治10）年2月15日、50年ぶりともいわれた大雪の中を、総勢1万3千人の各隊が次々に出発しました。一行は、明治政府に対して抗議をするという名目で一路東京へ向かいます。

その際、薩摩軍は、熊本鎮台総司令官・**谷干城**少将に、薩摩軍総大将・西郷隆盛の名で通達を届けます。その内容は、「明治政府へ質問をする必要があり鹿児島を出発、これから陸軍少将らが率いる鹿児島の兵隊らが熊本を通るので、整然と通過できるようにしてほしい」というものでした。しかし、すでに薩摩軍に抗戦すると決定していた政府側の意図を受け、熊本鎮台はこれを拒否。熊本城にて戦闘が始まります。



谷 干城（1837～1911）
土佐藩（高知県）出身士族。陸軍少将政治家。尊王攘夷運動に参加。長崎、上海視察後、西郷隆盛らと倒幕運動に加わった。戊辰戦争では大軍監として東北に転戦。佐賀の乱を鎮める任務にあたり、神風連の乱後、熊本鎮台司令長官に再任した。西南戦争では2カ月に及ぶ籠城で、薩摩軍の攻撃に耐え、熊本城を死守した。後に伊藤博文内閣の農商務大臣となった。

戦いの前夜、熊本城下は炎に包まれた

谷干城少将は、やってくる薩摩軍の兵力が熊本鎮台の兵力と比べ強大であることなどから、※籠城作戦をとることを決定。2月18日、熊本市内に住んでいた陸軍将校らの家族たちも熊本城内に入ります。同じ日に熊本県庁が熊本市中に住む老人や子どもに避難指示を発令し、※号砲3発を合図に、熊本城の城門が閉鎖されました。19日には、明治政府が薩摩軍を反乱軍として開戦を布告。戦略上、見晴らしをよくするため、城下を焼き払ったと言われています。

※籠城作戦
敵に囲まれて城にたてこもり、戦うこと。

※号砲
銃砲を合図として打つこと。



桐野 利秋（1838～1877）
薩摩藩（鹿児島県）出身、士族。貧しい中で成長したが、武芸に優れ「人斬り半次郎」の異名をもつ。西郷隆盛の信頼を得て、鳥羽・伏見の戦いで奮戦。陸軍少将の位を得る。熊本鎮台司令長官、陸軍裁判所長を歴任したが、西郷を慕って鹿児島へ帰り、篠原国幹、村田新八らと共に私学校の運営に携わった。西南戦争では四番大隊長を務め、薩摩軍総指揮者として最後まで戦い、城山で西郷らとともに自害した。

トピックス 鎮台

1871（明治4）年に設置された旧日本陸軍の軍隊の単位。1873（明治6）年には東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本と6つの鎮台がおかれ、その下に14個の歩兵連隊がおかれます。主に※徴兵によって集められた兵で構成されました。1888（明治21）年には師団という単位にかわります。

※徴兵
1873年に出された徴兵令によって20歳以上の男子は3年間兵役につくことを義務づけられた。代入料を納めれば免除されたが、貧しい家の二男・三男は、それが出来ず徴兵された。



熊本城前、高橋公園にある谷干城像

旧肥後藩士も、薩摩軍へ続々参加

熊本にも、薩摩軍に協力しようとする旧肥後藩の士族たちがいました。西南戦争の約4カ月前に起こった、熊本での士族反乱である神風連の乱（→P9）は政府によって鎮圧されていましたが、不穏な状況は続いていたのです。旧肥後藩士らで形成された学校党という組織は、旧薩摩藩士らの動きを探るため、ひんぱんに鹿児島を偵察。その動きを追いながら、薩摩が挙兵したら自分たちはどうするのか、話し合いを重ねていました。

その後、薩摩は軍隊を組織し熊本へ入り、2月22日、いよいよ薩摩軍の熊本城攻撃が始まります。その時、学校党の士族たちは現在の熊本の健軍神社に集結し、薩摩軍に参加するのか議論を重ねます。意見は分かれますが最後には参加することを決定。学校党以外の党からも士族たちが集まり、**池辺吉十郎**（→P42）という大隊長の下、約1,500人からなる**熊本隊**が結成されました。この中には玉東町出身の**櫻田惣四郎**も参謀として参戦しています。また、※**植木学校**を創設した自由民権運動家の**宮崎八郎**のもとに結成された**熊本協同隊**も、薩摩軍に参加します。彼らを**党薩諸隊**といい、1万数千人が集まりました。



植木学校記念碑



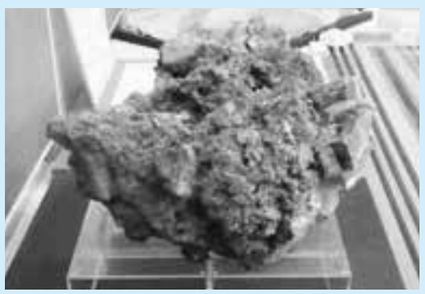
宮崎 八郎（1851～1877）
肥後藩（熊本県）荒尾市出身。藩校「時習館」で学んだ後、上京し、自由民権運動のリーダーとして活躍。民権学校「植木学校」を創設した。西南戦争では「熊本協同隊」を率いて薩摩軍と共に戦い、八代にて戦死。



※植木学校
1875（明治8）年植木町に開校した植木学校は、熊本で最初の自由民権派の学校。宮崎八郎らはルソーの「民約論」などをテキストにして、民権思想の普及に努めた。時代に先駆けた学校だったが、その教えが社会的に危険であるとして、県の命令で同年、閉鎖されてしまった。

トピックス 熊本城にて謎の失火

1877（明治10）年2月19日の午前11時10分ごろ、思いがけないことが起こります。籠城準備が進んでいた熊本城内で火事が発生し、熊本城天守閣と本丸御殿が全焼。火事の理由は、台所からの失火、薩摩軍による放火、そして、籠城への決意や戦いへの気持ちを高めるために官軍将校らが自ら火をつけたという説もありますが、いまだ謎に包まれています。



熊本城の発掘調査にて出土した焼けた瓦

いよいよ、熊本城総攻撃が始まった

1877（明治10）年2月22日早朝。薩摩軍は、城の三方向から熊本城総攻撃を開始。この中には、植木学校で結成された熊本協同隊も加わっていました。この薩摩軍攻撃に対し、熊本城の政府軍も砲撃で応戦。熊本城周辺はたちまち激戦となりました。しかし、1日で熊本城を攻め落とすことはできず、戦いはそのまま翌日に持ち越されます。

翌日、薩摩軍の攻撃はいっそう激しくなりました。特に、熊本城の西側にあたる段山（だにやま）からの薩摩軍の狙撃は正確で、熊本城を守る政府軍側の兵士たちは次々に銃弾に倒れたといいます。その時、包囲する薩摩軍約1万数百人に対し、鎮台兵は約3,400人余りでした。

熊本城の政府軍は劣勢で、当初、それほど長く持ち応えられないだろうと思われていました。



現在の熊本城



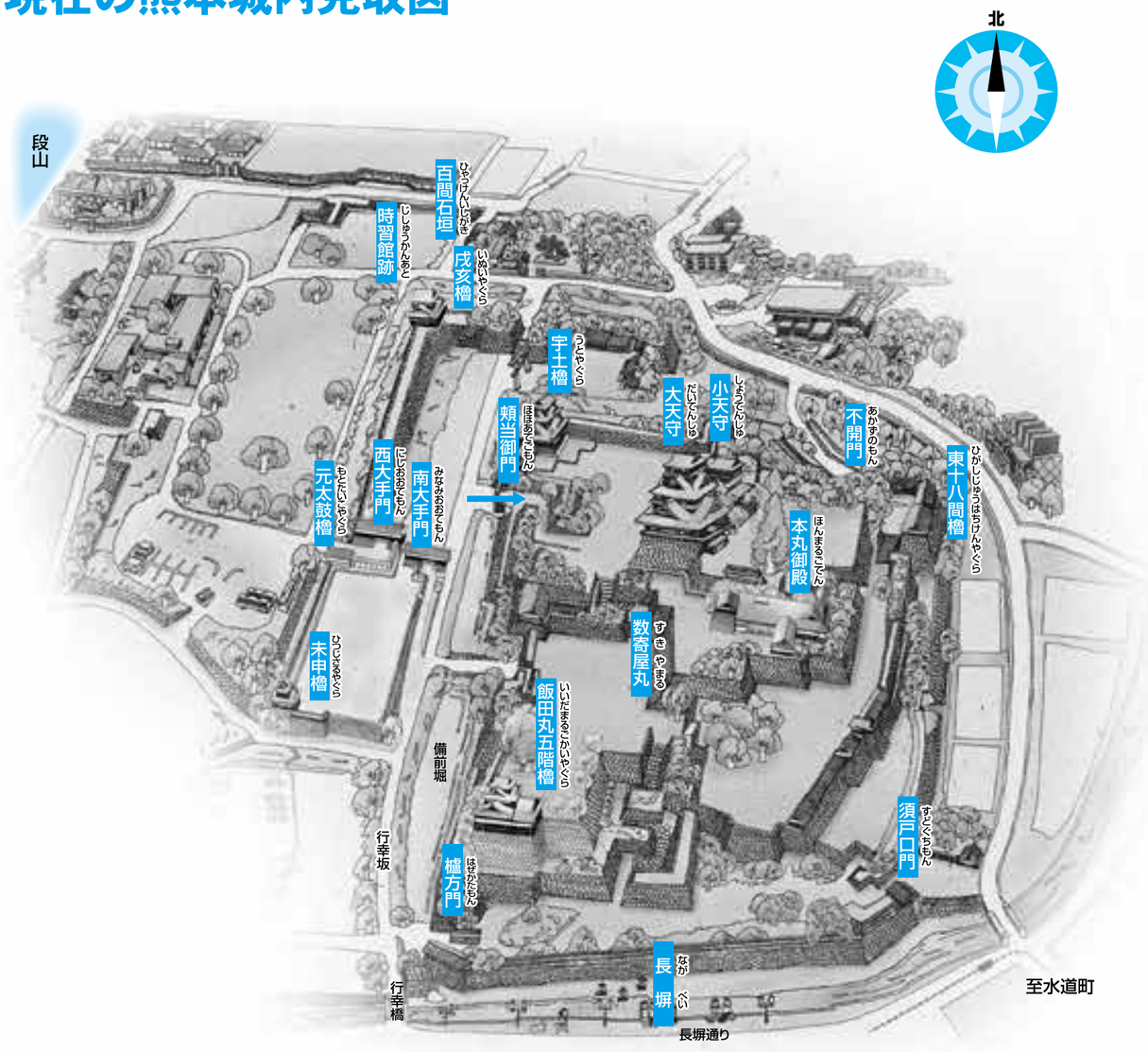
熊本城の行幸橋際にある加藤清正像

天下の名城熊本城

ところがここで、戦国時代の武将**加藤清正**がつくり上げた「熊本城」が、その力を見せます。加藤清正は土木の神様とも呼ばれ、熊本城だけでなく、農業のための用水路や河川改修などでさまざまな場所を整備し（→P8）、熊本の地を潤わせた人物です。今でも、熊本の人々には「清正（せいしょこ）公さん」と、親しみを込めて呼ばれています。

戦国時代の戦いを生き抜いた名将が造った熊本城は、「武者返し」と呼ばれる反り返った石垣に代表されるように実戦向きの城であり、簡単に攻め落とすことはできません。また、熊本鎮台総司令官・谷干城が率いる決死の籠城も簡単には崩れず、最初は優勢と見られた薩摩軍もただ戦力を失っていくのみで、苦戦をしいられます。

現在の熊本城内見取図



トピックス

「自分は加藤清正に負けたようなものだ」

熊本城の籠城は54日間にも及び、籠城した約3,400人が耐え抜きました。籠城作戦は、戦国時代にも「捨て身の戦法」であり、籠城で勝ちを収めた戦はあまり例がありません。加藤清正がつくった戦国の城は、築城から実に270年もたってからその本領を発揮したのです。敗走する西郷隆盛が、「自分は、加藤清正と戦って負けたようなものだ」と語ったと伝えられています。もし熊本城が攻め落とされていたら、西南戦争の結果も変わり、士族の反乱が続いて明治時代の混乱はもっと長引いたかもしれないと言われています。

なぜふるさと（植木・玉東）が激戦地になったのだろう

熊本と福岡を結ぶ主要道路上に、植木と玉東はあった

なんとか東京へ向かって北上したい薩摩軍。そして、熊本城に籠城する味方を救うために援軍を送りたい政府軍。その両方が陸路をとる場合にどうしても通らなければならないのが、現在の福岡県を通って熊本へつながる豊前街道と、三池往還や吉次往還（→P8）と呼ばれていた道でした。

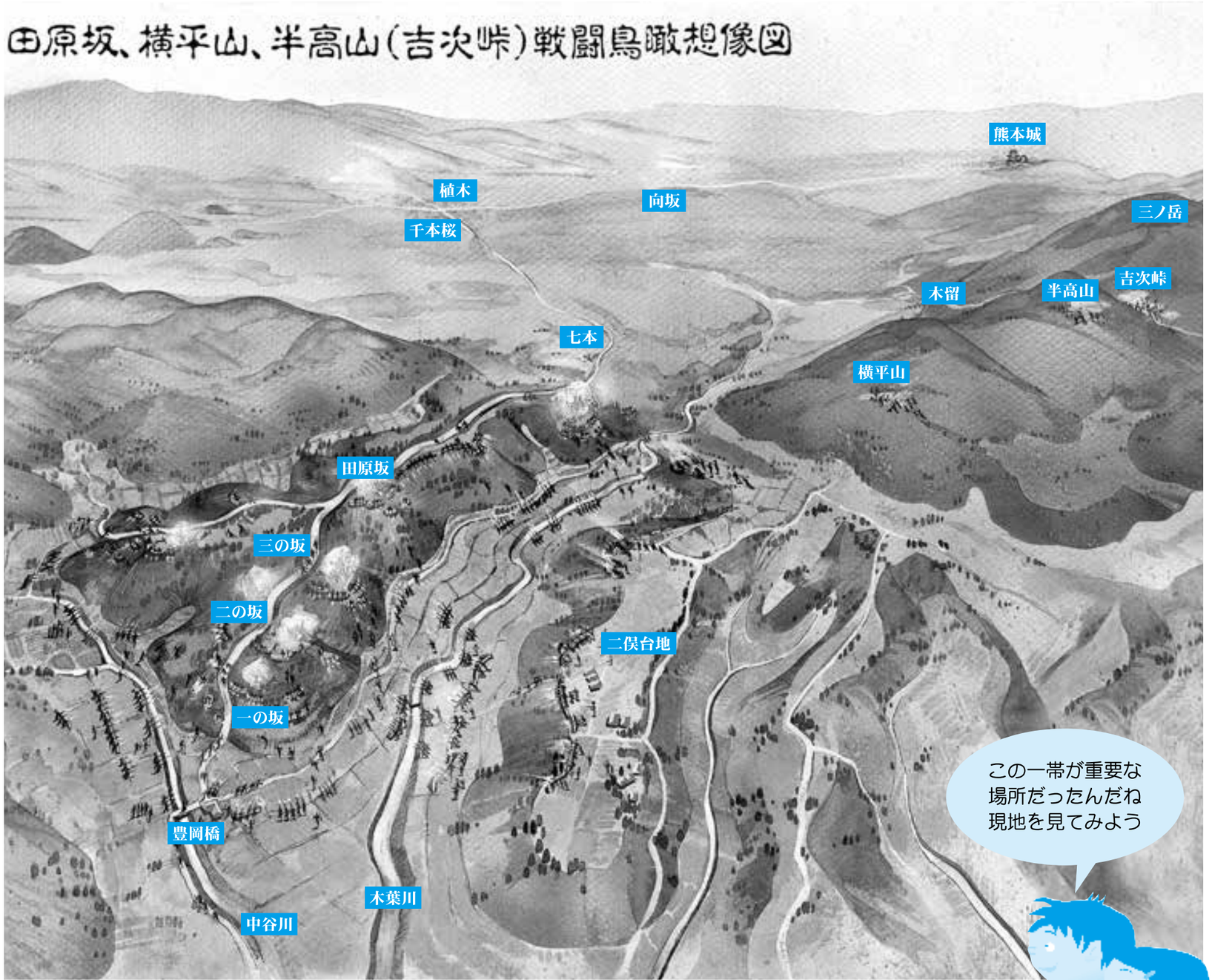
豊前街道は、現在の熊本市からたどると、国道3号を北上し、山鹿市を抜けて南関町を通り福岡県の大牟田市へとつながっています。一方三池往還は、国道3号の植木で分岐し、田原坂を通って玉名市へと向かっています。西南戦争では、これらの道で政府軍と薩摩軍が激突を繰り返し、両軍ともに、数え切れないほどの兵士が命を落としました。その中でも特に悲惨な戦いが日夜行われたのが、三池往還や吉次往還が通る植木・玉東一帯だったのです。

南北に連なる低い山々が、山城のような役割となった

熊本市北区植木町と玉名郡玉東町にある、標高250mの吉次峠、294mの半高山、144mの横平山、そして105mの田原坂。これらは、熊本城の北約10kmの一帯で、南北に連なるように位置しています。その並びは、福岡方面からやってくる政府軍にとってみれば、熊本城を守るように立つ山城が連なっているようなもの。薩摩軍にとっては、熊本城へ向かう政府軍をせき止める「天然の要塞」の役割を果たす場所でした。

また、これらの山々は、「台地」とも呼べるほどの低さだったため、周囲を見渡しやすいという利点がありました。周囲を見渡せるということは、ここを先に占拠しておけば、下から攻めてくる敵を迎え撃ちしやすいのです。また、峠は狭く、先に陣地を築き兵士で固めておけば、そこを通ろうとする敵を一網打尽（いちもうだじん）にできます。これは加藤清正が先に目をつけ、熊本を守る北の※障壁（しょうへき）としていました。

※障壁
へだての壁。さまたげ。



実戦向けにつくられていた 田原坂

「雨は降る降る　じんばはぬれる　越すに越されぬ　田原坂・・・」。民謡「田原坂」の歌詞は、田原坂を必死で攻める政府軍が、すさまじい勢いの薩摩軍に押され、どうしても田原坂を越えられないことを歌ったものです。

実はこの田原坂も、熊本城と同じく加藤清正が指示して造らせた道といわれています。道路は土をえぐるようにして造られていて、道路の両側をわざと高くしているのです。そのため、ここを通る敵を迎え撃つ側は、両側の高いところから簡単に狙うことができます。しかも道路は何カ所も曲がっていて、角に塁（陣地）を築けば、そこでスピードダウンする敵を狙い撃ちすることができるように考えられていました。これは、熊本城と同じ造りです。熊本城は、門から天守閣までの道が何カ所もL字型に曲っており、そこには高い石垣が配置されていて、侵入する敵を狙えるようになっています。田原坂も熊本城も実戦向きに考えぬかれた構造をしていたのです。

政府軍は多くの人馬、また大量の武器や食糧を運ぶためには、この道を通らざるを得ませんでした。そのため、薩摩軍の猛攻を受けることとなったのです。


現在の田原坂

図解 田原坂





豊岡眼鏡橋
現在も当時とあまりかわらない姿で残る眼鏡橋。1802年につくられたもので、熊本の年代のわかる石造眼鏡橋の中では最も古い。この橋の幅が当時の道の幅と言われています。
（MAP **B-1**）

トピックス

西南戦争錦絵

西南戦争当時の錦絵は、新聞報道や言い伝え、うわさなどをもとに、画家が想像を交えながら、庶民の心情や好みに合うように制作したものです。奮戦する薩摩軍将校や兵士の姿を描いた物が多く、当時の人々が薩摩軍に対して同情や、声援をかけていた情況が読み取れます。



トピックス

政府軍・薩摩軍の武器、武装



薩摩軍兵士


政府軍兵士

政府軍には、兵士一人ひとりに洋服の制服が支給されていました。使用した主な銃器はスナイドル銃という小銃で、これは、薩摩軍が主に使ったエンフィールド銃を改良し、手元で簡単に弾丸をこめることができ、雨にも強く、銃の先に剣を取り付けたまま発射することができました。

これに対し薩摩軍は、幹部以外、思い思いの着物姿で、主に旧式の銃を使用し、1発撃つごとに、銃の先から弾丸と火薬を別々に込めなければならず、火薬が雨に濡れると使うことができませんでした。17日間続いた植木・玉東での戦いは半分以上が雨でした。水をはじかない着物を着て、旧式の銃を使った薩摩軍は、「一に雨、二に大砲、三に赤帽（政府軍の近衛兵）」は、苦手であると嘆いたそうです。


両軍で使用された四斤山砲のレプリカ





食糧の違い


武器 スナイドル銃（主に政府軍が持っていたといわれる）

写真提供:田原坂資料館

植木 向坂の戦い

（マップ:D-2）

政府軍が、薩摩軍に軍旗を奪われる

熊本城救援のためにまず駆けつけた政府軍は、陸軍の**乃木希典**少佐が率いる※小倉第十四連隊の中の一隊でした。薩摩軍と初めて戦ったのは熊本城攻撃開始と同じ2月22日の夜。場所は、植木の向坂でした。

この時、戦いをしかけてくる薩摩軍の勢いはすさまじく、乃木少佐はひとまず退却を決断します。ところが植木の千本桜付近まで退却した時、連隊旗手の河原林雄太少尉がおらず、隊の軍旗が薩摩軍に奪われてしまったことに気付きました。軍旗を奪われるということは軍にとって許されないことであり、大きな恥でもあります。乃木少佐は戻って戦い、軍旗を奪い返そうとしますが、部下の必死の説得に止められてその日はあきらめました。薩摩軍はその後、応援を待つ熊本城内の政府軍から抵抗する気力をなくそうと、奪った軍旗を籠城する熊本城の兵士たちにわざと見せつけたと伝えられています。

※小倉第十四連隊
陸軍の軍隊の一つ。福岡県小倉に拠点があり、秋月の乱、萩の乱にも出動している。

植木エリア



河原林少尉戦死の地



千本桜･乃木大将記念碑

エピソード

乃木将軍は、死ぬまで屈辱を忘れなかった

軍旗が奪われた理由にはいくつかの説があり、本当のところは定かではありません。乃木少佐が後で語ったところによると、河原林少尉に兵士十数人を付け、軍旗を背負って向坂から退却するように命令。ところが河原林少尉が殺され、軍旗が奪われてしまったと伝えています。しかし、政府軍の本営だったらしい場所に置き去りにされていた軍旗を、植木に入った薩摩軍の熊本協同隊の斥候（偵察者）が発見し、持ち帰ったという話もあります。

どちらにしても乃木少佐は、日清戦争、日露戦争に従軍し、陸軍大将となった後も、この軍旗を奪われた事件に対する悔しさを忘れませんでした。そして、明治天皇の死にともなって※殉死する際、遺言に、西南戦争で軍旗を失ったことが殉死の理由であると記しています。



乃木 希典（1849～1912）
明治期の代表的陸軍軍人。西南戦争では小倉歩兵第十四連隊長心得を務め、指揮をとった。ドイツに留学し帰国後、軍紀確立などにかかわった。日清戦争では第一旅団長として旅順を占領。日露戦争では大将、第三軍司令官として出征した。明治天皇の信任厚く、明治天皇大葬の日、自宅で殉死し、夫人もその後を追った。

※殉死
高貴な身分の人や、主君の死に際して、後を追って自ら命を絶つこと。

玉東 木葉の戦い

（マップ:A-1・B-1）

2月22日の植木の向坂での戦いの後、乃木少佐率いる第十四連隊は、玉東町の木葉山から二俣まで退き、薩摩軍を迎え撃ちました。この時、増強された薩摩軍の勢いはすさまじく、前線を守っていた**吉松秀枝**少佐は、援軍を要請。ところが、第十四連隊に余力がないと考えた乃木少佐は、それを断ります。その後吉松少佐は、全力を尽くして薩摩軍と戦おうと突撃し、命を落としました。

一方、乃木少佐は、薩摩軍のすさまじい勢いに押され、木葉からの撤退を指示します。撤退の途中、乃木少佐は馬を撃たれて落馬するなど、あわやという事態も切り抜け、玉名の川床へたどり着きます。25日には政府軍の本隊が南関に到着し、ようやく乃木少佐は態勢を立て直しました。

吉松 秀枝（1845～1877）
土佐藩（高知県）出身。軍人。鳥羽･伏見の戦いには藩兵隊長として出兵。陸軍少佐第八大隊長となり小倉の第十四連隊に就いた。神風連の乱を鎮める任務にあたり、翌年西南戦争では熊本城救援に赴く。城外において薩摩軍と戦い戦死。享年33歳。

勢いを取り戻した第十四連隊は、25～27日の玉名市**高瀬の戦い**を経て、ふたたび熊本城を目指して進軍します。それまでとは逆に薩摩軍が押されて退却し、政府軍はついに、前回負けて退いた木葉付近、さらに田原坂へ兵を進めました。何度もこの坂を通って戦った乃木少佐は、田原坂の重要性を知っており、後方の隊に急いで来るように伝えます。ところが、後方部隊からの返事は「撤退」。この撤退がなければ、田原坂が後に激戦地となることもなく、政府･薩摩両軍のすさまじい数におよぶ戦死者を出すこともなかったかもしれないといわれています。

玉東エリア

乃木少佐奮戦の地

トピックス

高瀬の戦い



西郷小兵衛戦死の碑（玉名市）

熊本城を包囲した薩摩軍はさらにその精鋭を北上させ、熊本城救援に向う政府軍と高瀬（菊池川河川）にて衝突します。薩摩軍が最も北に進んだのはこの高瀬の戦いで、この日以降は守勢にまわります。この戦いで西郷隆盛の末弟小兵衛が戦死。彼は薩摩軍一番大隊一番小隊長として自ら陣頭指揮し弾丸に胸を貫かれて壮絶な最後をとげました。近くの民家橋本家の雨戸板を外して小兵衛を運んだとされています。西郷隆盛は遺体が運ばれてくると、瞬きをしただけで終始無言であったそうです。薩摩軍主力は菊池川を越えて北進することはできず、高瀬の古い町は戦火で大部分が焼失しました。

植木 玉東 田原坂・二俣の戦い

（マップ:B-1・B-2）

3月3日、木葉で政府軍が圧勝

2月27日の高瀬の戦いに敗退した薩摩軍は、約1万人の兵力を田原坂、吉次峠、そして山鹿に送り、約50kmに及ぶ防衛陣地を築いて、政府軍を迎え撃つ作戦に出ます。これに対し政府軍は援軍の到着を待ち、3月3日、木葉で両軍が激突します。

迫りくる政府軍を木葉山に陣をかまえた薩摩軍が必死で迎え撃ちますが、政府軍の射撃に押され、最後には敗退。翌日政府軍は木葉に本営を設置し、ここを拠点に田原坂攻めを開始します。



上木葉官軍本営跡

3月4日、いよいよ田原坂の激闘が始まった

3月4日、前日の勢いに乗った政府軍がいよいよ田原坂へ進撃し、この日から田原坂17日間の戦いが始まりました。政府軍に対し、薩摩軍も必死に応戦。田原坂のある植木台地には碁盤に石を並べたように塁が築かれたといいます。道は両側が高くなっており、迫りくる敵を狙いやすいようになっていたため、薩摩軍は坂の曲がり角に塁を築くとともに、道路両側の土手に横穴を開け、逆茂木と呼ばれる先のとがった木を使ったバリケードなども設置していました。政府軍は予想外に苦戦し、使用した弾丸は予定の5〜6万発を大きく上回る数10万発に及びました。

トピックス

民謡　田原坂

熊本民謡　田原坂

雨は降る降る　じんばは濡れる
越すに越されぬ　田原坂
右手(めて)に血刀（ちがたな）　左手(ゆんで)に手綱(たづな)
馬上ゆたかな　美少年



美少年の像

全国にも知られ、民謡田原坂に歌われている、美少年のモデルについてはさまざまな説があります。その一つには、西郷隆盛と共に、城山で最後まで付き添い、ともに戦った村田新八（→P42）の長男・村田岩熊（享年19歳）が“美少年”のモデルではないかといわれていますが、この戦いで散っていった多くの若者のことと解釈してもよいでしょう。

エピソード

密偵・谷村計介

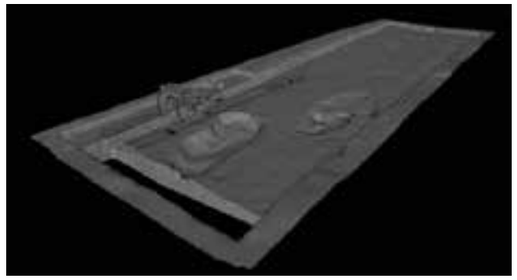
明治時代の軍人。熊本鎮台に入り、佐賀の乱、台湾出兵などを経験し、西南戦争の際、谷干城の命で高瀬の政府軍と連絡をとるため薩摩軍に包囲された熊本城から脱出。城外の政府軍との連絡を果たしました。明治10年田原坂で戦死。享年25歳。宇蘇浦官軍墓地に葬られています。



谷村計介の碑

二俣台地からの砲撃

政府軍は、田原坂正面からの攻撃に加え、玉東町二俣台地に大砲陣地（砲台）を築き、側面からの攻撃も開始しました。
砲撃はほぼ毎日続き田原坂の薩摩軍に大きなダメージを与えました。二俣台地の瓜生田、古閑というところに砲台が造られたといいます。



二俣瓜生田砲台跡検出遺構3D測量図（大砲はイメージ）



二俣台地の砲撃跡
近年の発掘調査では大砲の轍が発見されています。

政府軍、警視抜刀隊の編成

兵器や物量・兵・情報量で薩摩軍より勝った政府軍ですが、士族が主体の薩摩軍は示現流（剣法）の切り込みによる戦法で、農家、商人出身者が多い政府軍に大きな打撃を与えました。そこで政府軍は、東京警視庁・士族出身の警部・巡査を中心とした**警視抜刀隊**を組織し対抗します。抜刀隊の中には戊辰戦争の際、当時政府軍だった薩摩藩士族と戦い敗れた者らが多く、「戊辰の恨みを晴らす」と声をあげながら戦ったという話もあります。政府軍の抜刀隊は、田原坂や横平山を突破する原動力となって貢献しました。

後の1885（明治18）年に、この抜刀隊をモチーフにして歌がつくられました。東京帝国大学教授の外山正一が作詞し、フランス人の陸軍軍楽隊教師シャルル・ルルーが作曲したもので、1〜6番まであります。鹿鳴館で発表され、軍歌として親しまれました。

抜刀隊の歌

吾は官軍我が敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大将たる者は
古今無双の英雄で
これに従うつわものは
共に慄悍決死の士
鬼神に恥じぬ勇あるも
天の許さぬ反逆を
起こせし者は昔より
栄えしためし有らざるぞ
敵の亡ぶるそれ迄は
進めや進め諸共に
玉散る剣抜きつれて
死する覚悟で進むべし

トピックス

弾痕の家

植木町田原坂資料館横にある、西南戦争で被害にあった家を当時の写真を元に復元したものです。戦場では数多くの銃弾が飛び交い、壁にはその跡が残りました。わたしたちの郷土に住んでいた人々もこの戦争に巻き込まれ、疎開した人も多くいましたが、家財を壊されたり、財産を奪われたり、また強制的に軍を手伝わされた人たちも数多くいました。



玉東

吉次峠の戦い

（マップ:B-3）

吉次峠死守を決意した熊本隊

旧肥後藩士・池辺吉十郎とともに、熊本隊として薩摩軍に参加したのは、同じく旧肥後藩士だった**佐々友房**です。彼は、玉名の高瀬につながる近道であった、吉次峠の重要性に当初から目を付けていました。

2月24日、佐々率いる熊本隊は、政府軍を迎え撃つため吉次峠を越えます。翌25日、玉名の高瀬まで進んできた政府軍と戦って彼らを撃退。しかしその後、逆に政府軍に押され、2月26日、吉次峠まで退却します。

この時、熊本隊は、吉次峠からすでに薩摩軍が退却していることを知りました。しかし、このまま熊本隊も吉次峠を捨てて退却すれば、戦略的に重要なこの地が政府軍に奪われます。佐々は、「今ここを政府軍に取られたならば、百人の西郷隆盛がいても政府軍に立ち向かえなくなる。このままここにとどまって死ぬのも、退却して十日後に死ぬのも同じ。それならば、吉次峠を守って死のう」と決意し、隊の兵士たちを奮い立たせました。刀で道ばたの木の肌を削り取り、そこに、「敵愾隊悉ク此ノ樹下ニ死ス」とその決意を墨で黒々と記したそうです。

政府軍大敗 地獄峠とよばれた吉次峠

3月3日、吉次峠での激しい戦いが始まりました。吉次峠を越えようと、玉名方面より進撃してきた政府軍を、薩摩軍が迎え撃ちます。10万発以上の弾丸が飛び交いますが、先に吉次峠を守っていた薩摩軍に、峠の険しさも有利に働きました。攻め入ろうとする兵を寄せ付けない“城”のような役割を峠の地形が果たしたのです。熊本隊を率いる佐々友房は、「吉次の険は城よりも険なり」と、その険しさを詩にあらわしています。

薩摩軍の攻撃に、政府軍の死傷者はどんどん増え、200人以上が命を落としました。その後、政府軍兵士はこの吉次峠を「地獄峠」と呼び、近づくことさえ恐れました。



佐々友房の詩碑

佐々 友房（1854～1906）
肥後藩（熊本県）出身。政治家。教育者。西南戦争では熊本隊一番小隊長として戦い、降伏後収監された。出獄後、国家の人材養成を目的とした学校、同心学舎（後の済々黌）を同志と共に熊本に創設。さらに帝国議会開設に備え熊本国権党を設立し、副総理に就いた。帝国議会開会とともに熊本県第1区選出衆院議員となり、没年まで連続当選。「戦袍日記」著者。

エピソード

篠原国幹の戦死

吉次峠で政府軍を退けた薩摩軍でしたが、薩摩軍の一番大隊を指揮していた篠原国幹が撃たれて戦死。軍を率いる重要な一人が亡くなったことは、薩摩軍にとって大きな痛手となりました。

旧薩摩藩士だった篠原国幹は、明治政府では陸軍少将を務めましたが、西郷隆盛が明治政府を去る時に、ともに鹿児島へ帰りました。西郷の信頼も厚く、軍人としてたいへん勇敢な人で、吉次峠での戦いでも、隊長である自分が、マントを着て太刀を持った勇壮な姿で先頭に立つことで、兵士たちを奮い立たせようとします。この時、政府軍の中に、篠原国幹を見知っている江田国通少佐という人がいました。彼は射撃兵に、「マントを着た人物を撃て」と命令し、篠原は銃弾を浴びて亡くなりました。江田少佐もその後、復讐に燃える薩摩軍兵士に狙撃されて戦死。薩摩軍の二本木本営に運ばれた篠原の遺体の側で、西郷は大粒の涙を流したと伝えられています。



篠原国幹（1837～1877）

玉東

横平山の戦い

（マップ:B-2）

両軍の要衝の地、横平山

横平山は、玉東町の二俣台地の南端にある小高い山で、田原坂を見渡せる位置にあります。二俣の政府軍砲台の側面にあたり、薩摩軍本営がある植木の木留に通じる道が傍らを通ることから両軍にとって戦略上重要視されました。

玉東エリア



横平山山頂の記念碑

警視抜刀隊の活躍

両軍が横平山の重要性に気づき、激しい争奪戦が始まったのは3月9日ごろです。何度か戦いがあり、ようやく政府軍が占領しますが3月15日、再度薩摩軍に奪われます。そこで政府軍は、主力を横平山に差し向け、彼らは一斉に横平山の薩摩軍に突撃。中腹にあった塁を奪うことに成功しました。しかし薩摩軍も頂上を守り、必死で迎え撃ちます。政府軍は、頂上まであとほんの少しというところで猛烈な銃弾を浴び、多くの死傷者を出しながら、頂上を奪えずにいました。

そこに、南関から駆け付けた警視抜刀隊50人が加わりました。彼らは一団となって頂上の薩摩軍に斬り込み、同時に、ほかの兵士たちも突入。薩摩軍は大混乱に陥り、全員が敗走します。警視抜刀隊の突入から薩摩軍の敗走まで、わずか5分だったと伝えられています。

この戦いで、薩摩軍兵士はもとより、政府軍抜刀隊もほとんどが死傷するなど、横平山争奪戦は、西南戦争の三大激戦の一つにあげられるほど激しいものとなりました。この戦いの結果、政府軍が田原坂を背面（七本方面）から攻撃し、挟みうちすることが可能となり、3月20日、田原坂の戦いにおける政府軍の圧勝につながったと言われています。

トピックス

発掘調査でわかった「横平山戦跡」

横平山では調査の結果、横平山北側斜面全体にて、約600点の銃弾関係遺物が出土。そのほか、山腹にて刀の鍔や政府軍兵士の制服付属品などが出土しました。また、山頂部分にて当時の塹壕跡を確認。これら塹壕の配置や遺物出土状況により、政府軍の進撃方向など当時の戦闘の様子が明らかになりつつあります。



抜刀隊のものと思われる刀の鍔

植木

田原坂陥落

（マップ:B-1）

ついに、田原坂は政府軍の手に

田原坂の戦い最後となる3月20日、この日は早朝から豪雨でした。政府軍は早朝、この雨と濃霧で見通しが悪いことを利用して、二俣台地に分散していた隊を、田原坂と二俣台地の間にある谷間（立花木～七本）に集結させます。そして、薩摩軍が守る田原坂の左右と中央の三方向から一気に攻撃をしかけました。この時、田原坂にいた薩摩軍の兵は、高鍋隊という新しくやってきた部隊だったということもあり、不意をつかれて、混乱を極めます。薩摩軍は総崩れとなり、17日間にわたる激しい田原坂の戦いは終わりました。この田原坂での戦いに政府軍が勝ったことで、全国各地にいた政府に不満を持つ士族たちの薩摩軍への参加を断念させることができたと言われています。

熊本城開城

政府軍は、その時すでに八代から援軍が上陸して熊本城に近づきつつあり、熊本城に籠る熊本鎮台も合わせ、3万人を超える兵力が熊本に整いました。しかしそれでも、簡単には屈しない薩摩軍が必死で戦ったため、政府軍がようやく熊本城に入れたのは、田原坂の戦いが終わって1カ月もたった4月14日でした。その翌日の15日、ずっと熊本の二本木で戦況を見守っていた西郷隆盛は、夜の闇にまぎれ、薩摩軍の隊士に守られて熊本をあとにしたのでした。

トピックス

従軍記者と田原坂の戦い

西南戦争では、戦況を伝えるために、新聞記者が政府軍に同行し、飛び交う弾をかいくぐりながら、戦場の様子を伝えています。これが従軍記者のはしりとも言われています。

福地源一郎（桜痴）は日本のジャーナリストの草分け的人物です。1874(明治7)年、政府系の「東京日日新聞」に入社し、西南戦争勃発後、自ら戦地に出向きます。田原坂の戦いなどに従軍記者として現地からの戦争報道を行い、その記事は大反響を呼びました。また、後の第29代内閣総理大臣を務めた犬養毅も慶應義塾在学中に、「郵便報知新聞」の記者として西南戦争に従軍しています。

県下各地での戦い

●南関町

西南戦争までは「みなみのせき」と呼び、一説によると、戦況の電報を打つ際、文字を簡単にするため「なんかん」の四文字にしたと言われています。政府軍は大本営を正勝寺に置き、西宗寺には政府軍の病院もおかれ、乃木連隊長も高瀬（玉名）の戦いで足に銃弾を受けた際に運ばれています。いくつもの墓碑が苔むして並ぶ「城ノ原官軍墓地」、「肥猪町官軍墓地」がそのことを伝えています。


正勝寺

●山鹿市

山鹿は熊本から北九州・小倉へ通じる豊前街道の要路に当り、薩摩軍の田原坂陣地から北に延びた戦線の重要な拠点を構成していました。町の中心部の旅館は薩摩軍の本営になりました。オブサン古墳の入口には石の扉に喰い込むような弾の痕があるほか、博物館前の民家には一本の柱に10個の弾痕が残るなど農家をも巻き込んだことがよく分かります。


オブサン古墳

●八代市

球磨川河畔でも両軍が激突しました。薩摩軍は形勢不利のため先を争って球磨川へ飛び込み逃げ、それを堤防の上から政府軍が撃ち、川が真っ赤に染まったといいます。熊本協同隊の宮崎八郎は、堤防で戦っていた薩摩軍三番大隊小隊長辺見十郎太の身代わりとして、「君が死ねば薩摩軍は総崩れになる俺にまかせろ」と指揮旗を持って仁王立ちになり弾を受けました。


宮崎八郎の碑

●御船町

西南戦争の難を避けるために、熊本県庁は郊外の御船へ移されました。御船町では二度にわたり激しい攻防がありました。薩摩軍三番大隊長永山弥一郎は、町なかの一軒の家に百円を渡し、火を放って自決しました。当時の百円は立派な家が新築できる金額です。永山の人柄とその壮烈な最後は御船の町の郷土史の一頁を飾っています。


永山弥一郎自害の地

●山都町

薩摩軍は矢部（現山都町）に退き、西郷隆盛もここに入り薩摩軍の主力が矢部に集結しました。このときは総勢わずか3,000人余になっています。本営を酒造家備前屋、今の通潤酒造という所に構え、全軍の指揮は桐野利秋がとりました。矢部で戦いはありませんでしたが、薩摩軍はここから三つに分かれて人吉へ向うことになります。西郷隆盛は籠に乗り、人目を避けて人吉へ向かいました。


通潤酒造

●南阿蘇村

鬼官兵衛と呼ばれた佐川官兵衛は戊辰戦争のときは“賊”として薩摩・長州の兵に追われ、後に西南戦争が始まると今度は“政府軍”として賊軍（薩摩軍）と戦い、壮烈な戦死を遂げました。佐川官兵衛の戦死の場所は、西南の役公園となっており、数基の記念碑と共に墓が並んでいます。


鬼官兵衛記念館

●人吉市

西南戦争の開戦前、西郷隆盛は人吉から舟で球磨川を下って熊本へ向います。また、敗走する時には人吉の新宮家屋敷に泊まり、川で魚を釣り、山に狩りにもおもむいています。人吉城跡、青井神社、永国寺、造り焼酎酒家の古い土蔵などには、当時の物語が多くのこっています。


新宮屋敷

戦禍に見舞われた植木・玉東

住民も巻き添えになり、悲惨な目にあった

西南戦争の舞台となったことで、平和な暮らしが壊されてしまったのが、植木・玉東の住民たちです。流れ弾に当たるなどして、多くの住民が命を落としてしまいました。

そのほか、大きな被害の一つが、放火によって家が焼かれてしまうことでした。政府軍も薩摩軍も、進撃または退却する時に、敵が隠れられないように家々に火を放ちました。住民たちの多くは避難していましたが、放火によって家財道具まで失う羽目（はめ）となったのです。植木町史によれば、戦火でほぼ全滅、またはほとんどの家屋が焼かれてしまった村が数多くあったということです。焼失はまぬがれても、避難している間に財産を奪われてしまった住民も少なくありませんでした。農作業も行うことができず、収穫は激減しました。

また、玉東町史によれば、弾薬などの武器やけが人を運搬するために、一部の心無い薩摩軍に無理やり駆り出され無賃金で働かされたり、脅（おど）されて米などの食糧やわらじを提供したり、食事の炊き出しをさせられた住民たちもあったということです。

戦後も長く続いた、住民たちの苦しみ

3月初めから始まった植木・玉東一帯での戦いも、政府軍の勝利で、4月に入ると落ち着きを取り戻しつつありました。しかし、住民たちにはその後も戦争の後始末が待っていました。戦争で家や家財を失った住民たちへの政府の救済や補償制度は、急ごしらえであったために混乱、学校も火事で焼かれていたため、子どもたちは勉強する場を失ってしまいました。

そのほか、戦いが激しい間、その場しのぎで簡単に埋葬されていた薩摩軍兵士遺体を深く埋め直すなど、埋葬のやり直しなども行われました。腐敗（ふはい）した遺体が原因で、コレラなどの流行病がまんえんすることも心配されていたのです。

このように、西南戦争は、植木・玉東の住民たちにとっては、家や財産を失うという、目に見える被害だけでなく、家族を失った悲しみや人の死を目の当たりにした恐怖など、戦争が終わっても長い間、大きな苦しみをもたらしたのでした。

トピックス

全国に残る薩軍兵士の墓

西南戦争に従軍して投降した薩摩軍兵士たちは、長崎で裁判を受け、約2,700人が北海道を除く全国の監獄に送られました。中には獄中で病死した者や、刑期を終えても鹿児島に戻らず、その地に残った兵士もいました。全国には、こうした薩摩軍兵士たちの墓が数多く残っています。

官軍墓地

1878（明治11）年、政府は、西南戦争で亡くなった政府軍兵士を丁重に葬るために官軍墓地を造りました。熊本市植木町には七本官軍墓地、玉東町には高月官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地があり、田原坂や吉次峠、横平山で亡くなった多くの兵士が葬られています。



七本官軍墓地

わたしたちの郷土に伝わる、西南戦争こぼれ話

玉東町

●玉東住民の最初の死者は、2月22日の木葉の戦いで流れ弾に当たって死んだ上木葉村農家の長男（13歳）でした。彼は、突然村が戦場となり便所に隠れましたが、そこに弾丸が飛び込んできて頭に当たり死亡してしまいました。

●3月初めの吉次峠での戦いで、原倉村住人16歳が、穴かまどに逃げ込んでいましたが、そこに砲弾が命中して亡くなりました。

●薩摩軍が村に来ると民家が邪魔になるので全部焼いてしまうと、政府軍から連絡があった。住民は不平、不満でブツブツ言いながらも、言われた通りしないと後が恐いので、山の方に家財道具を運び出したが大変だった。連絡があった2、3日後に全部の家に火を付けて焼いてしまいました。

●家の上の畑に登ったところ、政府軍が酒盛りをしていた。「お前も飲め」と言って無理に酒をすすめ串に刺したさかなをくれたので「これは何というさかなですか」と聞くと「これは薩摩軍というさかなだ」というので恐ろしくなって逃げ出したと言っていました。

●政府軍を賄うのに人手が足りないので、この村の人たちは全部狩り出されていた。そして握り飯を作ったり、負傷者を運んだりさせられました。

出典：「歴史への招待　西南の役と玉東町」

熊本市北区 植木町

●祖父の話。初め薩摩軍がたむろしていた。やがて政府軍が入ってきて「どっちの味方か」と聞くのでとっさに「政府軍」と答えて助かった。彼らは、薩摩軍が隠れていないか、片っぱしから火を付けた。

●祖父と父の話。政府軍が入ってきた時、逃げ遅れた薩摩軍兵士をかくまった家がある。政府軍が家々に火を付け薩摩軍兵士をあぶりだそうとしていたが、その家の人間が「薩摩軍は決して隠れていません」と頼んだので政府軍は何もせず立ち去り、隠れていた薩摩軍兵士は泣いて別れを惜しんだ。

●父が薩摩軍に参加したのは、数え年で17歳の時。8月に熊本隊が政府軍に降伏したがそれを知らないまま各地を転々とした。ある村で仕事を習いながら家族同様にかわいがってもらっていたところ、薩摩軍兵士と分かり故郷へ返された。若かったので罪はまぬがれた。

●祖父の話。薩摩軍が入ってきて、周辺の家々を宿にした。飯炊きや風呂炊きに住民をこき使い、刀で脅す者もいた。家族は家を出て窪地や壕（ほり）に入り、布団などを弾よけにして住んだ。薩摩軍が敗れた後、家に帰ると村はほとんどが焼かれていた。

●父の話。戦いのあった翌日、堀畑に将校が倒れていたので、家の墓に埋葬した。七本に政府軍の墓ができる時その遺体は発掘されていった。この将校が河原林少尉であった。

出典：「植木町史」



西南戦争終結まで

田原坂や吉次峠をはじめ、熊本県内各地での戦いに敗れた薩摩軍は、人吉での戦いを経て、宮崎県各地を転戦し、敗走を続けます。やがて政府軍の攻撃に、降伏する部隊も出てきました。西郷隆盛は「解散令」を出し、熊本隊を始め九州各地から集まった部隊は、政府軍に降伏し、自害する者もいました。

薩摩軍は、政府軍との戦いを続けながら南下し、9月1日ふるさと鹿児島市内に戻りました。鹿児島に集まった政府軍は、薩摩軍が立てこもった鹿児島市街北部にある丘、**城山**を包囲します。その頃、薩摩軍はすでに弾薬や食料が底をつき、兵士の数も減り、総勢370人ほどになっていました。

9月24日、大砲の音が鳴り響き、一斉攻撃がはじまり、西郷隆盛も弾を受けて負傷します。そして、「もうこのへんでいいだろう」と六・七連合大隊長別府晋介の介錯により自害しました。享年51歳でした。その死を見届けた桐野、村田、別府らの諸将も討ち死にし、こうして明治10年9月24日、薩摩軍は城山において全滅しました。

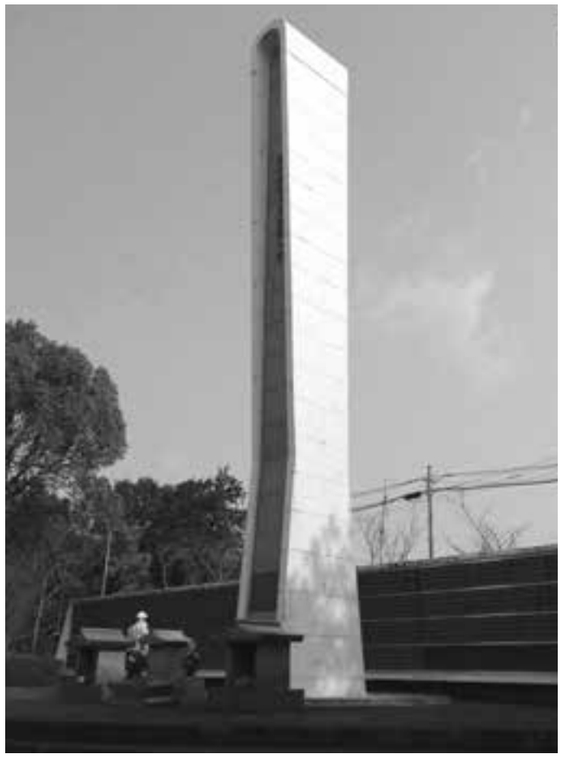
西郷隆盛が自害する4カ月前、「維新の三傑※」と呼ばれた木戸孝允が京都で病死し、翌明治11年、大久保利通が暗殺されます。木戸、西郷、大久保は、明治新政府樹立の中心にたってきた人物で新しい時代の礎となって亡くなっていきました。

※維新の三傑
明治維新の改革を指導した、西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通をいう。西郷が軍事、大久保が経済、木戸が政治を行った。

多くの人々が命をおとした西南戦争

薩摩軍は熊本隊なども含め総勢約３万人。対する政府軍は約6万人が戦争に加わりました。計9万人のうち1万3千人がこの戦争で亡くなったといわれます。賊軍といわれた薩摩軍もそれを制圧した政府軍も「いい国をつくろう」という思いで戦い、尊い命が奪われました。

毎年3月20日には田原坂で慰霊祭が行われます。西南戦争で亡くなった多くの魂のことを想い、平和な世の中が続くことを皆で祈っていきましょう。



西南役戦没者慰霊之碑

トピックス

日本赤十字の前身“博愛社”はここから生まれた

ヨーロッパ視察で敵味方の区別なく救護する赤十字活動に深く感銘を受けていた、元老院議官佐野常民は、西南戦争で多くの死傷者がいることを伝え聞き、その救護活動が急務なことを痛切に感じ、“博愛社”の創設を決心しました。しかし、「敵味方の区別なく救護する」という考えが理解されず、政府に申し出を却下されたので、熊本県庁やジェーンズ邸で指揮をとっていた征討総督有栖川宮熾仁親王に直接創設を願い出ました。

5月3日、許可を得るとすぐに、同じ元老院議官だった大給恒と共に、木葉の※大繃帯所に博愛社をおき、赤十字の精神に基づき、負傷兵の手当を行ったといわれています。救護に当たった人は120人、救護を受けた人々は、明らかになっているだけでも1,429人に及びます。これが日本赤十字運動の起こりといわれています。1886（明治19）年、日本もジュネーブ条約に加盟し、翌年、博愛社から日本赤十字社と名前を改め、佐野常民が初代社長に就任しました。現在、博愛社創設請願書を提出した5月1日を日本赤十字社の創立記念日としています。

※大繃帯所
戦闘で負傷した兵士を収容し、手当てする施設。



正念寺
木葉の大繃帯所の一つ。山門には当時のまま生々しい銃弾跡が残る。





徳成寺
木葉の大繃帯所の一つ。本堂は当時のままの姿。



ジェーンズ邸
現在、熊本市水前寺公園にあるジェーンズ邸は、当時は熊本城の一角にあり、1871（明治4）年に西洋文化を取り入れるために教師ジェーンズを招いて熊本洋学校を設立した由緒ある建物です。田原坂の戦いの後、博愛社創設の願い出がなされました。



その後の日本はどうなったのだろう

軍事の強化

西南戦争は、大規模な近代戦として、その後の日本軍の軍統制にも多大な影響を及ぼしました。

この戦争で新政府は、作戦に必要な物資の補給や整備、連絡など近代戦に必要な経験や知識を得ることになり、その後、軍の近代化を進めていきます。

一方で、近距離での戦い（白兵戦）では薩摩軍に対抗できず、急きょ編成した警視庁の抜刀隊が活躍したことを受け、剣術が見直されて、その後、警視庁を中心に復興しました。

また、西郷隆盛を総大将とした薩摩軍の士気の高さから、兵士の戦意など精神的な面の教育も重視されるようになり、明治政府は天皇を陸海軍のトップとして、君臨させることで軍事力を強化するようになります。

西南戦争後の経済

西南戦争にかかった費用は4億円にものぼり、当時の税収のほとんどを使い果たすほど莫大なものでした。政府は、戦争にかかる費用を調達するため、金銀などとの交換が保証されない紙幣（不換紙幣）を乱発したため、※インフレーションが発生しました。戦争は、当時の国民の多くを占める農民を没落させ、その一方で、一部の大地主や財閥資本家が現れるきっかけとなりました。その結果、大規模な資金の投資ができるようになり、日本の近代化を進めることになりましたが、貧富の格差は拡大しました。

※インフレーション
通貨の発行が増え、貨幣の価値が下がり、物価が上がる現象。

自由民権運動の発展 近代化への歩み

西南戦争やその他の不平士族の反乱は、明治政府のつくった法律、規則に強制的に従わせようとする新政府への反発でもありましたが、この反発は**自由民権運動**へと移り変わり、武器や暴力ではなく議論を通して政治を変えていこうとする動きになっていきます。



政府軍、薩摩軍出身者はその後の日本にどう関わっていったのだろう

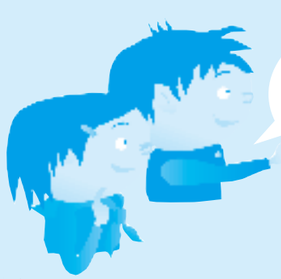
西南戦争により、西郷隆盛をはじめ、明治政府樹立に貢献した多くの人材が失われましたが、その後の日本の政治は、近代化へ向けて急速に動いていきます。西郷隆盛とともに征韓論争をきっかけに、政府を去った**板垣退助**が自由民権運動や、**国会の開設**に貢献します。また西南戦争で費用の調達や、その後の財政運営にあたっていた**大隈重信**など、政府軍、薩摩軍として戦った人々も近代化を進める政府の役職につき、政治を担っていきます。一方、乃木希典をはじめ、軍人たちは、その後に起きた日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦などに関わっていきました。

トピックス

西郷隆盛の先祖は熊本の菊池家

あまり知られていませんが、西郷家のルーツは熊本です。

熊本県の菊池市七城町にある西郷という集落がふるさととされています。西郷家はそれまで仕えていた菊池家が滅んだ後、薩摩藩に仕えます。西郷隆盛が一時、幕府の改革をくわだてたことが理由で、奄美大島に※遠島された時、自分のことを「菊池源吾」と名乗っていたことも伝わっています。



※遠島
江戸時代の刑罰の一つで、罪をおかした人を離島で生活させるもの。


西郷南洲（隆盛）祖先発祥の地碑

トピックス

竹橋事件

1878（明治11）年8月23日、東京都千代田区の竹橋にある近衛砲兵大隊の兵士により、日本軍はじめての反乱事件が起こりました。原因は、西南戦争の徴兵で駆り出された農村出身の次男・三男の兵士が、西南戦争の賞金の遅れや、給与の削減などに不満をつのらせて起したとされます。その行動の背景に自由民権思想の影響があったという説もあります。この事件に参加した暴動兵は、250人以上にのぼり、彼らは軍幹部を殺害し、営内に火を放つなどし、一大事件となりました。この事件後、軍は規律を徹底させるようになります。

私たちにできること

植木・玉東地域には、たくさんの遺跡が残り、西南戦争での多くの人々の犠牲を物語ります。その歴史の上に私たちの今の暮らしがあります。これらの貴重な遺跡を守り、未来へ伝えていくために何ができるか考えてみましょう。

①探す
郷土にはどんな遺跡があるのか、自分で探したり、おじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみましょう。

②調べる
探した遺跡がどのようなものか、どんな歴史があるのか詳しく調べましょう。

③比べる
他の地域に残る遺跡と、つながりを調べてみましょう。

④考える
遺跡を守り、残すことが私たちにとってなぜ大切なのか考えてみましょう。

⑤残す
これから遺跡を未来に残していくために何ができるのかを考え、行動しましょう。

⑥伝える
郷土に残る遺跡の由来について、周りの人へ伝えていきましょう。

調べるときに役立つ場所や人たち

熊本市植木文化センター・玉東町中央公民館
市役所、町役場にはいろいろな部署があり、それぞれ詳しい人たちがいます。教育委員会には地元の文化財や歴史などの情報が集まっています。

歴史資料館
植木や玉東地域の歴史資料を集め、保護しているところで、展示なども行っています。実際に当時使われていた物や関係資料を見ることができます。（植木町田原坂資料館）

図書館
いろいろな見方で書かれた西南戦争の本や、戦いに関わった人物の資料などくわしい歴史について読むことができます。

博物館
博物館には展示や保存だけでなく、専門の人たちが調査・研究しています。研究の新しい情報などもあり、より詳しく学ぶことができます。

トピックス

植木町田原坂資料館

西南戦争で使用された銃器類や、大砲模型、電文、錦絵、貴重な写真、生活用品、文献、手紙など約250点が展示されています。館内では田原坂の戦いがビデオで紹介されており、資料館付近では、戦いの舞台となった二俣台地や半高山も見渡すことができます。



メ　モ

月　日（　）

月　日（　）

月　日（　）

月　日（　）

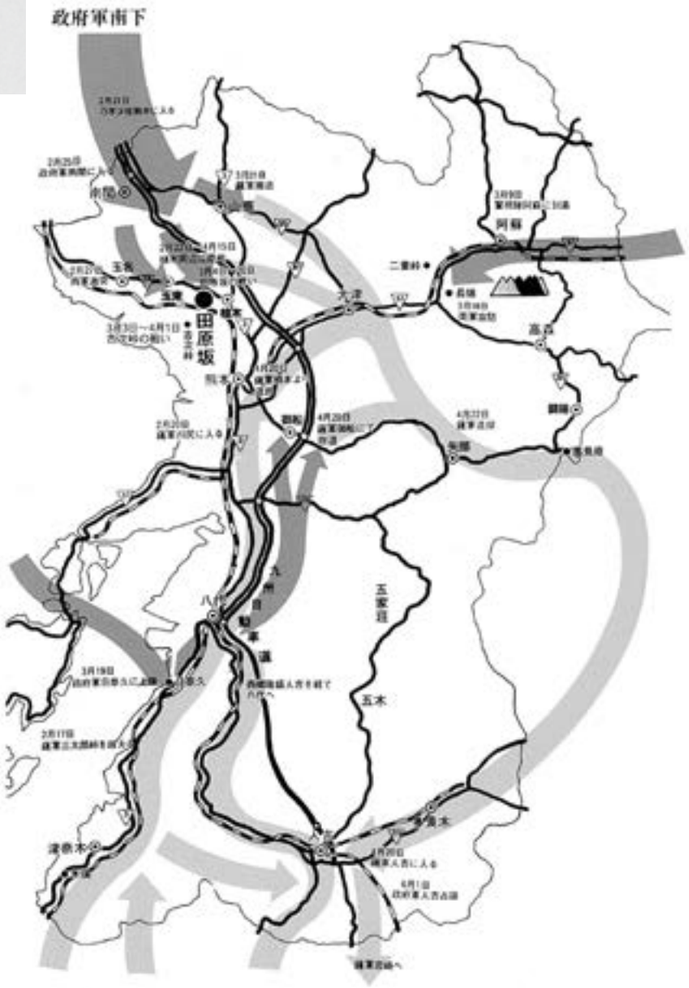
年表　西南戦争の動き

年月日	動き
明治　6年 10月 23日	西郷隆盛、征韓論に敗れ、辞表提出。桐野、篠原ら西郷派士官辞職
11月 10日	西郷、桐野とともに鹿児島へ
明治　7年 2月 4日	「佐賀の乱」起こる
明治　9年 10月 24日	熊本で「神風連の乱」起こる
10月 27日	福岡で「秋月の乱」起こる
10月 28日	山口で「萩の乱」起こる
明治 10年 1月 29日	私学校党、鹿児島で暴挙
2月 15日～17日	西郷、桐野、村田ら鹿児島をたつ。兵13, 000人
2月 18日	政府軍　乃木希典（陸軍少佐）第十四連隊の一部を率いて熊本に向かう
2月 19日	熊本城炎上　～21日まで市街延焼
2月 20日	薩摩軍の先鋒、別府晋介の二大隊川尻に入る
	民権党（40数名）保田窪神社へ結集、熊本協同隊結成
2月 22日	植木で乃木少佐、連隊旗を奪われる。薩摩軍、熊本城を包囲完了
2月 23日	政府軍第十四連隊、木葉にて敗れる
2月 24日	山県参軍博多に到着　薩摩軍熊本城強攻を中止、主力は山鹿、田原、木留に進出
2月 25日	政府軍第一、二旅団南関に入る。高瀬の戦い
2月 27日	薩摩軍三方より高瀬を強襲、西郷小兵衛戦死　乃木少佐負傷
3月 3日	政府軍、木葉・吉次に攻撃を開始
3月 4日	田原坂の攻撃開始～3月20日　田原坂・二俣の戦い
	薩摩軍一番大隊長 篠原国幹、玉東町原倉六本楠で戦死
3月 19日	高島鞆之助の別働第二旅団、船で日奈久に上陸
3月 20日	政府軍、田原坂を占領
3月 26日	薩摩軍、石塘口をせき止め、熊本城を水攻めにする
4月 1日	政府軍、吉次・木留を占領
4月 12日	政府軍、御船を占領、永山弥一郎（薩摩軍三番大隊長）戦死
4月 14日	政府軍、熊本城入城
4月 15日	薩摩軍、植木・荻迫・鐙田・三ノ岳より退却
4月 20日	政府軍、御船で大勝　薩摩軍、矢部に退却。22日西郷らは人吉へ退却
5月 28日	西郷、宮崎へ入る
6月 1日	政府軍、人吉を占領
7月 31日	政府軍、宮崎佐土原を占領
8月 2日	政府軍、高鍋を占領
8月 14日	政府軍、延岡を占領
8月 16日	西郷、解隊布告
9月 1日	西郷ら、鹿児島に入る
9月 22日	城山で西郷の命による決死の抵抗
9月 24日	政府軍、城山を総攻撃。西郷、桐野、村田ら戦死す。　西南戦争終結

西南戦争激戦の軌跡



熊本県下激戦の軌跡



西南戦争関連項目一覧　両軍の編成

政府軍の編成

征討総督		有栖川宮熾仁親王
参軍		陸軍中将　山県有朋
参軍		海軍中将　川村純義
第一旅団	旅団長	陸軍少将　野津鎮雄
	参謀長	陸軍中佐　岡本兵四郎　　陸軍中尉　鮫島重雄
第二旅団	旅団長	陸軍少将　三好重臣 陸軍少将　大山巌（別働第一旅団司令長官兼任） 陸軍大佐　黒川通軌
	参謀長	陸軍大佐　野津道貫
第三旅団	旅団長	陸軍少将　三浦梧楼
	参謀長	陸軍大佐　揖斐章
第四旅団	旅団長	陸軍少将　曽我祐準
	参謀長	陸軍中佐　品川氏章
別働第一旅団	旅団長	陸軍少将　高島鞆之助　　陸軍少将　大山巌
	参謀長	陸軍中佐　岡澤精
別働第二旅団	旅団長	陸軍少将　山田顕義
	参謀長	陸軍大佐　黒川通軌
別働第三旅団	旅団長	陸軍少将兼大警視　川路利良 陸軍少将　大山巌（別働第五旅団司令長官兼任）
	参謀長	陸軍中佐　中村尚武
別働第四旅団	旅団長	陸軍大佐　黒川通軌
	参謀長	陸軍中佐　山地元治
別働第五旅団	旅団長	陸軍少将　大山巌（別働第一旅団長兼任）
	参謀長	陸軍中佐　品川氏章
新撰旅団	旅団長	陸軍少将　東伏見宮彰仁親王
	参謀長	陸軍中佐　長坂昭徳
熊本鎮台	司令長官	陸軍少将　谷干城
	参謀長	陸軍中佐　樺山資紀
	参謀副長	陸軍少佐　児玉源太郎
歩兵第十三聯隊	聯隊長	陸軍中佐　與倉知實
第一大隊	大隊長	陸軍少佐　奥保鞏
第二大隊	大隊長	陸軍少佐　林隼之助
第三大隊	大隊長得心	陸軍大尉　小川又次
歩兵第十四聯隊	聯隊長得心	陸軍少佐　乃木希典
第一大隊	大隊長	陸軍少佐　津下弘
第二大隊	大隊長得心	陸軍大尉　青山朗
第三大隊	大隊長	陸軍少佐　吉松秀枝
砲兵第六大隊	大隊長得心	陸軍大尉　塩屋方圀
予備砲兵第三大隊	大隊長	陸軍大尉　左乙女英武
工兵第六小隊	小隊長	陸軍大尉　筒井義信
海軍		海軍中将　川村純義
その他		

合　計	約60,000人

薩摩軍の編成

私学校党　計	約13,000人	
薩摩軍総指揮官		西郷隆盛
参謀格		淵辺高照
副官		仁礼景通
一番大隊	大隊長	篠原国幹
	小隊長	西郷小兵衛
二番大隊	大隊長	村田新八
	小隊長	松永清之丞
三番大隊	大隊長	永山弥一郎
	小隊長	辺見十郎太
四番大隊	大隊長	桐野利秋
	小隊長	堀新次郎
五番大隊	大隊長	池上四郎
	小隊長	河野主一郎
六・七連合大隊大隊長		別府晋介
六番大隊	大隊長	越山休蔵
	大隊長	袖木彦四郎
	小隊長	鮫島敬輔
七番大隊	大隊長	児玉強之助
	小隊長	坂本敬介
貴島大隊	大隊長	貴島清
砲一番隊	砲隊長	岩元平八郎
	砲隊長	讃良清蔵
	砲隊長	餅原正之進
砲二番隊	砲隊長	田代五郎
	砲隊長	桂宗右衛門
	砲隊長	柴山四郎兵衛

党薩諸隊・微募隊　計		約17,000人
微募隊		約10,000人
党薩諸隊	熊本隊	池辺吉十郎　佐々友房
	熊本協同隊	平川惟一　野満兄弟　宮崎八郎
	龍口隊	中津大四郎
	高鍋隊	石井習吉　平島重綱　坂田諸潔
	延岡隊	大島景保
	飫肥隊	伊東直記　川崎新五郎
	佐土原隊	島津啓二郎　鮫島元
	報国隊（竹田隊）	堀田政一
	人吉隊	黒田等久麿　村田量平
	中津隊	増田宋太郎　後藤純平

合　計	約30,000人

西南戦争に関係する人たち

政府軍に関係する人たち

有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）	皇族、政治家、軍人。王政復古後、新政府の総裁となり、戊辰（ぼしん）戦争に東征大総督、西南戦争に征討総督として出征した。明治10年陸軍大将、22年参謀総長。明治28年死去。享年61歳。
伊藤（いとう）　博文（ひろぶみ）	長州藩（山口県）出身。政治家。松下村塾に学び尊王攘夷運動では重要な役割をはたした。明治維新でも活躍。特に維新の三傑亡きあとの藩閥政治で中心的役割を担う。憲法制定のためヨーロッパに渡りドイツの憲法を調査。初代内閣総理大臣。立憲政友会総裁。韓国統監。ハルピンで安重根（あんじゅうこん）に暗殺された。
江田（えた）　国通（くにみち）	薩摩藩（鹿児島県）出身。薩英戦争、戊辰（ぼしん）戦争で活躍。明治7年陸軍少佐。西南戦争に近衛歩兵大隊長として出征。吉次峠で薩摩軍の篠原国幹を狙撃させ倒すが、敵弾を受け戦死した。享年30歳。
大久保（おおくぼ）　利通（としみち）	薩摩藩（鹿児島県）出身。政治家。幕末は西郷と共に倒幕運動に活躍し、明治維新でも政府の中心的存在となった。岩倉使節団に参加し帰国後は政治の実権を握った。明治維新に不満を持つ士族によって暗殺された。木戸、西郷とともに維新の三傑と称される。
大隈（おおくま）　重信（しげのぶ）	肥前藩（佐賀県）出身。政治家。明治政府で制度の確立に努めるが、自由民権運動が起こるとこれに同調し国会の即時開設をもとめ伊藤博文らと対立。政府を去って立憲改進党を設立。早稲田大学創立者。
木戸（きど）　孝允（たかよし） （桂（かつら）　小五郎（こごろう））	長州藩（山口県）出身。政治家。松下村塾（しょうかそんじゅく）に学び尊王攘夷運動の中心人物。明治政府の中心的存在。岩倉使節団にも参加。西郷、大久保とともに維新の三傑と称される。
佐川（さがわ）　官兵衛（かんべえ）	会津藩（福島県）出身。警察官。鳥羽・伏見の戦いで奮戦し勇名を馳せた。帰郷後は家老として政府軍への徹底抗戦を唱え、敗戦後、東京での禁固生活を送った。征韓論争が起こると、政府の要請を受けて子弟300人余を率いて上京し、1等大警部となったが、同年、西南戦争に従軍にて警視抜刀隊を結成。壮絶な戦死を遂げた。
山県（やまがた）　有朋（ありとも）	長州藩（山口県）出身。軍人、政治家。長州藩出身で、吉田松陰の松下村塾に学び、高杉晋作らと奇兵隊を率いて倒幕運動に活躍。明治維新後に新政府より欧州視察の命を受け、帰国後は新体制の形成に深くかかわった。西南戦争時には参軍を務め、政府軍全体の指揮をとった。第3・9代内閣総理大臣、初代内務大臣などを歴任。近代日本の基礎をつくった一人として中心的役割を果たした。

薩摩軍に関係する人たち

池辺（いけべ）　吉十郎（きちじゅうろう）	肥後藩（熊本県）出身。藩校時習館（じしゅうかん）に学び、明治に入ると玉名郡横島村（現玉名市横島町）に居を移して私塾「池辺塾」を興（おこ）した。西南戦争では佐々友房らと熊本隊を組織して、大隊長として薩摩軍に応じたが、途中熱病にかかり、政府軍に捕縛（ほばく）され長崎で処刑された。明治時代の政論家池辺三山はその子息である。
古閑（こが）　俊雄（としお）	肥後藩（熊本県）出身。薩摩軍熊本隊の幹部として九州各地を転戦。降伏後広島監獄で獄死する。享年24歳。「戦袍日記」は戦争中の手記を綴ったもの。
櫻田（さくらだ）　惣四郎（そうしろう）	肥後藩（熊本県）玉東町の出身。西南戦争では熊本隊の参謀として各地を転戦した。熊本隊は長井村（延岡市）で降伏後、各隊士裁判を受け各々刑に服したが、桜田は隊長の池辺吉十郎と同じく、斬刑に処された。櫻田は和歌に通じ、弟子の古閑俊雄と共に戦時中多くの詩を残こし、古閑俊雄の著作「戦袍日記」にも書かれている。
別府（べっぷ）　晋介（しんすけ）	薩摩藩（鹿児島県）出身。年少より桐野利秋と親しくし、戊辰戦争で活躍。明治5年、陸軍少佐となる。西郷隆盛とともに鹿児島に帰郷後、西南戦争に参戦。薩摩軍六・七番連合大隊長を務め、城山で西郷隆盛の介錯をし、その後自害した。享年31歳。
村田（むらた）　新八（しんぱち）	薩摩藩（鹿児島県）出身。年少より西郷隆盛に従い、王政復古運動、戊辰戦争などで戦った。征韓論で西郷隆盛とともに鹿児島に帰郷後、桐野利秋、篠原国幹らと私学校の経営に携わり、砲隊学校の監督を務めた。西南戦争では、薩摩軍二番大隊長として各所で奮戦。城山で最後の抵抗を遂げ戦死した。大久保利通にも将来を期待された人物。

メ　モ

月　　日（　　）

月　　日（　　）

月　　日（　　）

月　　日（　　）

熊本市北区植木町・玉名郡玉東町の連携した取り組みは、多くの皆様のご協力のもと成り立っています。このことに深く感謝の意を表しますとともに、これから西南戦争遺跡が未来に保存され、我が国の歴史を学ぶために活用されることを祈念いたします。

参考文献　発行者等

参考文献等

○『玉東町史　西南戦争編　資料編』　玉東町史編集委員会編　1995年
○『玉東町史　研究資料（2）　吉次往還』　玉東町史編集委員会編　1990年
○『植木町史』　植木町史編纂委員会編　1981年
○『歴史への招待　西南の役と玉東町』　玉東町　1981年
○『熊本県大百科事典』　熊本日日新聞社　1982年
○『熊本の風土とこころ』　熊本の風土とこころ編集委員会編　1978年
○『西南の役に関する調査報告書　墓標･戦跡･慰霊碑を中心とした調査』　植木町教育委員会　1989年
○『西南の役　田原坂資料集「歴史のはざまに」』　植木町　植木町教育委員会　1990年
○『西南の役　植木地区における官薩両軍戦死者名簿』　植木町　植木町教育委員会　1990年
○『西南の役戦没者名簿　植木町』　植木町　植木町教育委員会　1990年
○『田原坂資料館　改築事業　基本構想』　植木町　2010年

※政府軍･薩摩軍の表記に関しましては、遺跡名、地名をそのまま反映し、「官軍」「薩軍」と記しているところがあります。ご了承ください。
※歴史文化･食文化には諸説ある場合も多いので、ご指摘や新しい情報、お問い合わせ等ありましたら、玉東町教育委員会までお願いいたします。
※この本は文化庁の補助金を活用して作成しています。

発　行／平成23年12月改訂・第2刷 平成24年6月・第3刷 平成25年8月・第4刷 平成26年8月
第5刷 平成27年8月
編　集／植木町･玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会
発行元／玉東町教育委員会
印　刷／有明印刷

